

優れた逸品には、必ずそれを支える職人技がひそむ。羽根細工、クロコ、鉄工……各界で絶大な信頼を得ている職人たちの技を紹介しよう。

meister
001
羽根細工
Feathers

パリの華麗なるオートクチュールを支える、 創造的な羽根職人は何を生み出したのか。



エリックさんは、エルメスやマルセル・マロ・ロジューを経てルマリエへ。羽根のアクセサリは彼の発案。



羽根で「エリックセサリ」を作るエリックさん。微妙なニワスはうして作られていく。



アトリエの一角には蒸気が噴き出す器が置かれ、職人たちが汗ばみながら作業中。



エリックさんからの提案でエメリック・フランソワさん(写真)とのコラボが実現。



ニューヨークでのデザイナーらとの打ち合わせに持っていったサンプル。羽根の可能性を提案。



稀少性が高かったり、捕獲が禁止された鳥の羽根も多数ストック。夢のような逸品を製作する。

羽根細工の老舗アトリエを、 新機軸で蘇らせた。

シャネル、デイオール、ジバンシイ、華麗なパリ・オートクチュールを、最高級の羽根細工で支えるのが創業1880年のルマリエだ。パリ10区のアトリエでは職人たちがせつせと手を動かしている。「ここはこうして」と手本を見せて指示を与える人物こそ、アトリエ・テイック・ディレクター、エリック・シャルルドナシアンさんだ。

いまから9年前、エリックさんの羽根を使ったコレクションのコレクションがルマリエの創業者の孫、アンドレ・ルマリエの目にとまった。新しいテクニクやアイデアが生まれなくなつたメゾンを危惧する彼は、すぐさまエリックさんを工房に迎え入れる。市場に合った新しい感性が必要だったのだ。「僕は素材の新しい面を引き出そうとしていた。羽根を羽根ではないようなアイデアで作ったり、布とメラージュしたり、新しい技術で表現したりね」エリックさんは、デザイナーからの依頼に応えるのみならず、自分からテ

ザイナーに提案する職人だ。羽根と布を組み合わせたサンプルを自分で作りデザイナーに見せる。このサンプルから服が考えられることもあるという。若いデザイナーとのコラボレーションも老舗に活気を与えることになった。28歳の若きオートクチュリエ、エメリック・フランソワさんとの仕事はそのひとつ。出来上がったのは、モダンな2つの感性と伝統の技が見事にミックスしたコレクションだった。

「エリックは予想外のアイデアを出してくれる。この黒いドレスには黒い羽根を想像していたが、彼が雄鶏の羽根を提案したんだ」とエメリックさん。

また、1年前からエリックさんの発案でアクセサリのラインを開始。これも新マーケット開拓の一環だ。オートクチュールは万人のものではないが、アクセサリであれば多くの人がルマリエの職人技に触れることができる。

「ルマリエが唯一無二なのは素材への繊細な感性と製作の質の高さなんだ」と語るエリックさん。彼は老舗のDNAを尊重しつつ、新風を吹き込むミッシオンに取り組んでいる。